

プラトン主義とマゾヒズム

——ラ・ファイエット夫人『モンパンシエ公爵夫人』における「シャバンヌ」造型の意味——

萩原茂久

I 『クレヴの奥方』の前駆的作品としての

『モンパンシエ公爵夫人』⁽¹⁾

ラ・ファイエット夫人は『クレヴの奥方』の十六年まえ、すなわち一六六二年に『モンパンシエ公爵夫人』をオギュスタン・クウルベ書店から匿名で出版したが、この作品は分量において前者の五分の一にすぎず、はるかにテムポの早い、簡潔な文体によって粗描的に描かれたものであるにもかかわらず、『クレヴの奥方』の原型がすべてここにあり、明らかに同種の作品ないし前駆的作品であると、おおかたのラ・ファイエット夫人研究

者たちは認めている。

アンリ四世のバリ入京（一五九四）からマザランの死（一六六一）に至るバロック期⁽²⁾の幕が降りて、まさに古典主義時代が始まるうというそのほとんど最初の年にこの作品が出現したことは、感じられている以上にその意義は象徴的であり、もっと強くこの作品の小説史的重みが強調されなければならない。

一般に叙事詩的なバロック期の Roman héroïque が、古典主義時代の Nouvelle-Histoire に移行することによって、わざとらしい技巧的な用語や現実の様式化や、一種の理想主義は消え去って、小説は必然的にテムポの速

さと簡素さとを特徴とする文体と、事件・行動の内在性、厭世的な色調を帯びないわけにはいかない。

さて、一九二〇年代のラ・ファイエット夫人研究の開花期に、いく多の卓越した解釈と見解によって後続の研究者たちに目を開かせたハリー・アシントン⁽³⁾は、『モンパンシエ公爵夫人』にある『クレーヴの奥方』的要素としてつぎの四つの事項を指摘した。その第一は「歴史の枠組み」、第二は「十六世紀の宮廷生活」、第三は「政略的に結婚させられた、すぐれた女性」、第四は「結婚まえに知っていた『愛人』」である。が、この第四の点については必ずしも正確ではない。モンパンシエ夫人はたしかにまだ未婚のメズィエール嬢の時代に、相思相愛の相手としてギユイズ公爵を知っていたが、これに反してクレーヴ夫人は、シャルトルを名のついていたときにはまだヌムール公爵と出会っていなかった。もちろん、あらゆる点において宮廷随一の評判をとっていた男性であったから、彼が長期間不在であったときも、シャルトル嬢はクレーヴ夫人は他人からそのうわさをきき、その姿をひと目見たいと好奇心は燃やしていたであろう。クレーヴ夫人とヌムール公との出会いは、ローレル公爵とク

ロード王女の結納式のパーティのさいであり、デカルトの情念論を援用した当時流行の恋愛理論の不可欠な初段階——「おどろき」(いままで出会ったことがない非凡な相手であることを瞬間のうちに認識すること)がここで生じるのだから、アシントンの指摘のうち第四の事項は保留する必要がある。が、意思も尊重されず、政略的に結婚させられたため愛のない夫婦関係のなかに、第三者として女主人公の愛人(ないし恋びと)が侵入してくるという点には、二作品に共通性が認められることはたしかである。

さてそれでは、作品の基底部を形づくるこの三角関係が、それぞれ作品の思想に真にかかわり合っているかどうかを、見て行く必要がある。両作品は完成の度合いに差があるから、その点についても『クレーヴの奥方』の方が当然まさっている、といういいかたはここでは通用しない。でき具合の差を認めるとしても、作者の努力や意図する方向についての探究は少しも妨げられるべきではない。

十九世紀以後ラ・ファイエット夫人の作品についてはいくつかの印象批評的なものが存在したが、ドオソング

イル伯爵が出るに至ってはじめて、手固い調査研究を積みかさねた結果としての批評が成立した。わずかばかり『モンバンシエ公爵夫人』に触れている部分は、抜粋すればほぼつぎのような意味のことを述べている。⁽⁴⁾

「モンバンシエ夫人はクレーヴ夫人とくらべると、徳の高さにおいて劣り、その行為はより以上に罪のあるものといえるが、しかしながら軽率な行為の最中にまで名誉を守ろうとの心づかいや、上品さを崩すまいとの意図はないではなかった。が、彼女のためらいや、自分自身とのたたかいがよく描かれないうために、彼女の存在はクレーヴ夫人ほど興味をひかず、生き生きした様相を呈するに至らなかった。作品の中心的位置を占めるはずのモンバンシエ夫人の情念分析はかなり表面的であるとはいえない。ただ一方向においてはそうではない。それはギユイズ公が王妹を愛しているのではないかという疑心から彼女が嫉妬するときであり、その分析は読者を比較的によくひきつける。

つぎにギユイズ公についていえば、これはややヌムール公の水準に接近している。ヌムールがクレーヴ夫人への愛のためにエリザベス女王と結婚してイギリス王にな

ろうとの野心を放棄したように、ギユイズもまたモンバンシエ夫人にみさおを立てるために、王妹と結婚して義理の王弟になろうという意図を完全に捨て去る。ただヌムールが、修道院に相手がいっただのちもなお翻意せようと熱意を示してくるのに反し、ギユイズははるかに早くモンバンシエ夫人への恋情を忘れ去って行く。

夫のモンバンシエ公爵については、ドオソングイルはなんら注目すべきことばを費やしてはいないが、この点に関するアシュトンの評言によれば、この登場人物はあまりに粗描的にすぎるが、ラ・ファイエット夫人はすべての小説に「嫉妬」する登場人物を描き出すことを好んでいるという理由から、嫉妬する男としてモンバンシエを示したのだと述べている。⁽⁵⁾すなわち夫は一情念の象徴だといえよいのであり、クレーヴ公のように忠実で熱烈な感受性はなんらもたされてはいない。数度の内戦に休むひまなく召集されなければならなかったモンバンシエは、ようやくおとずれる休戦の短い期間に妻と生活するだけであり、たがいにじゅうぶん知り合うだけのゆとりもないようであり、ましてむつまじくし合う機会もないかのようである。極言すればモンバンシエは夫

という名を与えられた記号的存在にすぎないのである。

モンバンシエ夫人についてのアシュトンの見解は、彼女の「弱さ」に注目する。⁽⁶⁾ 彼女はけっして夫を裏切ろうとしてはいず、彼女ほどに誇り高い女性がそうできるはずもないのである。ただ彼女は弱かったのであり、結果として不実を働くことになってしまった。彼女はこの作品においてクライマックスを示す密会の場面において、弱さのゆえに事態の進行をとどめることができなかった。

——このように見ると、『モンバンシエ公爵夫人』における三角関係は作品構造的にはなほだ弱いものであることがわかる。しかもギユイズ公爵と同じような位置にアンジュウ公爵も存在してからみ合い、いっそうあるべき単一性の力づよさを弱める結果となっている。

それならば、この作品には他になにか特徴的な要素が存在するだろうか。

II 複合的・総合的造型としての「シャバンヌ伯爵」

私はつぎの理由から、「主人公ではない」としても、少なくとも最大に興味を抱かせる登場人物⁽⁷⁾と書かれるシ

ヤバンヌこそこの作品において最大の登場人物であり、主人公であり、それどころか唯一の主人公であるとさえいいたのである。シャバンヌの役割りとその心理とは複合的であり、あるときは保護者、あるときは夫、あるときは友人、あるときは恋びとであって、『クレージュの奥方』における夫クレージュ公爵、母親シャルトル夫人、伯父シャルトル管区防衛官、さらには愛し合う対象ヌムール公爵をすら兼ねた総合的存在であるといえる。

シャルトル夫人はこの世を去るにあたって残して行く娘の身の上を案じ、娘が夫以外の男をひそかに愛しているのを知って、彼女に遺言として訓戒を残して行くが、シャバンヌもまた、モンバンシエ夫人に夫の愛を獲得する方法を教えたり、彼女がギユイズとの仲に深入りしないよう、夫との関係が円満に行くよう念じたりしている。保護者・訓戒者としてのこの位置は登場人物シャバンヌをきわめて特徴的なものにしていく。

また彼がクレージュと強く比較できるのは、相互に抱く尊敬と信頼、「告白」を受けること、その死後に認識を新たにされること——などの点においてである。クレージュ夫人がクレージュ公に対して愛情とはちがう尊敬と感謝

を抱いたように、モンパンシエ夫人は同じ家に滞在するシャバンヌ伯に対して尊敬と信頼を寄せるのだが、しかも結婚後すぐシャンピニに妻を残し、対ユグノオの第二次内戦に参加して二年も不在であったモンパンシエ公の代わりに、愛情の相互的流出はないにしても、シャバンヌは一種精神的な夫の位置を占めていたといっても過言ではあるまい。また、クレーヴは妻から他の男に対する愛の告白を受けたが、この、『クレーヴの奥方』発表当時すでに大きな波紋を巻きおこしたカッコツきの「告白」を、シャバンヌはモンパンシエ夫人から受けねばならなかった。私は以前の論稿でこれを、「打ち明ける側からすれば相手は秘密の打ち明け相手にすぎず、逆に打ち明けられる側からすれば相手は愛する対象であるというつまり、『秘密の打ち明け』でもあり同時に『告白』でもあるもの」と書き、これを「秘密の打ち明け」から「告白」への移行態と規定したが、ほとんど「秘密の打ち明け相手」としか考えてもらえず、そこからは相対的な異性であるとする認識が欠落している点で、クレーヴもシャバンヌも対象として等質であるといえよう。——もう一点、死後愛する対象から認識を新たにされる点に

については、クレーヴ夫人は自分が死に追いやった夫こそ世にもこまやかな情愛を自分に注いでくれた唯一のひとであったことを身にしみて知るが、同じようにモンパンシエ夫人はサン・バルテルミイの大虐殺の折り、誤ってシャバンヌが殺されてしまったあとで、つぎのような状態に落ちるのである。

「ギユイズ公爵の不実を思うにつけても、彼女は、自分にあんなにもつくしてくれたひとを失なったことが、はげしい痛苦となっておそってくるのであった」

さらに、シャルトル管区防衛官の役割りまでもシャバンヌが負っているとは、なにをいうのだろうか。シャルトルは友人ヌムールのために、クレーヴ夫人と面会できるよう骨折ったり、彼女が修道院入りしたのちも懇願の手紙を書くことによって彼女に翻意させようとつとめた。とくにあの絵画的な、シャルトルの努力により実現したヌムールとクレーヴ夫人との最後の面会の場合は、シャバンヌがモンパンシエ夫人へのいちずな献身のためにギユイズを手引きして彼女に密会させる場面に通ずる、あるものを感じさせる。女主人公に対して恋愛関係の生じない公平無私な第三者——保護者・助力者の位置に、一方

的ではあるがはげしい愛情が流露する関係のうえにあるシャバンヌは、悲劇的なものだろうとつとめていたのだと、いえないだろうか。

最後に、シャバンヌが『クレージュの奥方』におけるヌムールですらあるというのは、ヌムールはクレージュ夫人と相互的な愛情に結ばれていたとはいえ、彼の愛は悲劇的なプラトニックの相より外に出ることができなかったことを意味する。シャバンヌがモンパンシエ夫人に対し、愛におけるプラトン主義の極限的な一つの姿を示したことにについては後述するが、そこには十六世紀以来つづいている、崇拜する異性への近づきがたさに焦慮と絶望のうちに死ぬほどである男の心情を、悲痛な調子でうたいあげる詩性が封じこめられているといったらよいだろうか。

以上、『モンパンシエ公爵夫人』におけるシャバンヌ伯爵の造型が実は複合的であり、総合的な性格をもつことについて考察してきたのであるが、それでもなお解明できないものがこの登場人物については残る。それこそこの作品が類のない独創性をもつことの証拠ではあろうが、結論をいそぐまえにもうしばらく考察を進めてみる

必要があろう。

III 「シャバンヌ伯爵」の「カギ」(モデル)ないし源泉

シャバンヌ伯爵がモンパンシエ夫人に熱烈な愛を抱き、さらにそれを相手に告白し、それが受け入れられなかったのちに、彼女とギューズ公爵とのあいだの手紙の運び役や連絡役を買って出たり、そのあげくには、この作品のクライマックスを形づくる、絵画的な密会の場面を成立させる彼の行為については、『クレージュの奥方』の内部をどれほど探してみても同種の発想は見いだされない。もし作者の全的な想像力がこの発想をえたとしたならば、この登場人物の——さらにはこの作品の独創性はいやましにその価値と重みを増すであらう。

しかし一般に創作の秘密として、作者の体験や見聞がなんらかの形で、少なくとも巧みに合成され変形されて作品に現われないということはまれだといってよい。ましてフランスの十七世紀においては、歴史的事件や同時代の実話、風聞や見聞の作品への利用が広く日常的におこなわれ、盗作も文学的な価値の問題はべつとして、倫

理的にはなんら非難はされなかった。当時の用語で「カギ小説」というものが存在し、読者の側からモデルを当ててたのしむという流行があり、ラ・ファイエット夫人自身も若いころ、驚異的売れ行きを示したスキュデリ嬢の『シリウス大王』の第六巻目から、モデルを読みとる遊びに熱中していたことは記録によって知られている。⁽¹⁰⁾背景がギリシャ神話の時代であろうと、前世紀のフランス宮廷であろうと、歴史上の有名な人物が描かれる場合は、同時代の実在の貴族階級のひとびとがモデルとしてそこにはめこまれるから、貴族の作者による小説はすべて「カギ小説」の一面をもっていたといえよう。

こういう時代的な空気の洗礼を受けた作者による作品が、彼女がより若かった時代ほどの意識的な努力による「カギ小説」の形成はないとしても、少なくともその発想法をそこに残していたであろうことは推定できる。ラ・ファイエット夫人についての実録的研究においては他に抜んでているエミール・マーニユは、『モンパンシエ公爵夫人』と、やはり作者による自身の出仕していた宮廷の記録『王弟妃アンリエット・ダングルテル』との比較をおこない、前者における登場人物の「カギ」を

後者に描かれた実在の人物に求めた。

モンパンシエ公爵夫人の前身メズィエール嬢は王弟妃アンリエットの素顔をのぞかせるが、それは「これほど無分別で、これほど抵抗性に乏しく、その熱しやうい生まれつきからくる衝動にこれほどたやすく負かされてしまふ」⁽¹¹⁾点においてである。奇妙な類似性はさらに、どちらも宮廷外で年少の時代をすごし、とつじょ宮廷に登場してくること。双方とも、その限らない魅力で男たちの注意をひきつけること。アンリエットはルイ十四世を慕いながらその弟と結婚し、メズィエール嬢はマイエンヌ公爵と婚約したがその兄のギュイズ公爵を愛していること。さらにまた、どちらも自分の結婚できなかった対象が他の女性を愛するのを眼前に見て苦悩すること。すなわち王弟妃は王がラ・ヴァリエール嬢を、モンパンシエ夫人はギュイズが自分の仕えるマルグリット・ドゥ・ヴァロワを愛し、あるいは熱心にかよってくるのを見て悩むのである。

いっぽうモンパンシエ公爵はかなり正確に王弟のイマージュを呈する。彼らは両方とも「嫉妬ぶかく、疑いぶかく、いらいらして、夫婦生活のもろい調和を理由もな

く破壊する⁽¹²⁾。ギューイズ公爵はギーシュ伯爵に似ている。『王弟妃アンリエット』で最大に筆が費やされるひとりであり、「このはなばなしく、無鉄砲な伊達者⁽¹³⁾」は、最初遊び半分に彼をあしらっていたアンリエットに、ついにひと目をしのぶ逢いびきをさせるに至る。小説のギューイズは大胆にも夜なカモンパンシエ夫人のへやにはいりいきなり現われた夫から危うくのがれるが、実在のギーシュも王弟妃のアバルトマンで不意に現われた王弟におどろき、暖炉のなかにかくれることによって巧みに罰を受けずにすませる。

さて、肝心のシャバンヌ伯爵はどうであろうか。彼もモンパンシエ夫妻やギューイズと同じく十六世紀に実在した人物ではあるが、モンパンシエ夫人と関係があったという記録はなく、マリーニユの推定によれば、これは作者の娘時代からの家庭教師メナージュにほかならないとされる⁽¹⁴⁾。空想的な頭と燃えやすい心をもって若い娘である教え子に夢中になり、その愛を告白するが嘲笑されてしまう。悩み、ぐちをこぼしながら従順に従い、よく我慢して教え子の悩みにも耳を傾け、いろいろ助言も与えてやる——こういうメナージュを「カギ」とするとの推測

は気のきいたものではあるが、強力な根拠が見いだされるところというほどでもない。

それについては、アントワーヌ・アダンの説も参考になろう。彼はメナージュ・シャバンヌ説に反対し、王弟妃とヴァルドとでやりとりする手紙を仲介してやっていた、王弟の近侍デュ・プレシ伯爵を挙げる⁽¹⁵⁾。この推定について考察するために、いま『王弟妃アンリエット』の原文にあるデュ・プレシについて書かれた箇所を引用してみよう。

「殿下の首席侍従デュ・プレシ伯爵は妃殿下に対する異常なまでの親切心から、いつもこのかたがヴァルドにお書きになる手紙、またヴァルドが妃殿下にさしあげる手紙を届ける役であった。それで彼は、この交渉がギーシュ伯爵、つづいてヴァルド自身に関係したものであることを、じゅうぶんよく判断できたはずであろうのに、この役まわりをつづけないではいられなかった⁽¹⁶⁾」

デュ・プレシ伯が愛人どうしの手紙の仲介役であったことは、作品中のシャバンヌが同じ役割りを演じたことに通ずるが、より重要なのはこの引用個所の後段である。この人物が理性に反して異常な行動をとりつづけたのは、

王弟妃に対する「異常なまでの親切心」からであろうが、これがシャバンヌのモンパンシエ夫人に対する異常なまでに親切的行動の一般的動機に似かよっていることは認められよう。が、デュ・プレシ伯が実際にとった行動はただ秘密の手紙の届け手ということでしか説明されておらず、また彼を女主人公とつねにいっしょにいられるシャバンヌとくらべると、デュ・プレシ伯をシャバンヌのいろいろな役まわりや行動のモデルとするにはかなり不じゅうぶんである。

それにまた、つぎのような事情も考え合わせなければなるまい。王弟妃はラ・ファイエット夫人に、自分の身辺でおこる事件のことは、その最中あるいは直後に打ち明ける習慣があったが、必ずしもすべてのことを打ち明けているわけではなかった。ところでメモワール作製を望んだ王弟妃は、一六六五年と六九年の二回にわたって一定期間内の事件のわずかなものをまとめてラ・ファイエット夫人に話した。そのなかには彼女にとって初耳だった事項がいくつ含まれている。⁽¹⁸⁾デュ・プレシの手紙仲介の件は、それら初耳だったで、きごとのなかにはいるのか、はいらないのか残念ながら証明できない。私の

推測では、この件は『モンパンシエ公爵夫人』執筆（一六六二年七月以前）以後におこったとされる可能性も大きい。もしそうならば、デュ・プレシをシャバンヌのモデルに採用することは不可能となり、アダンの説は根拠からくつがえされることにもなる。ラ・ファイエット夫人の実生活一般から強く暗示されるメナージュ・ジュリ・シャバンヌ説をいわずに退けてしまうわけにも行かない理由である。

要するに、『モンパンシエ公爵夫人』の主要登場人物のなかでは、シャバンヌがもっともその「カギ」を解く手がかりのない人物であり、その造型が前章で考察したように総合的な性格をもつことを考えても、数個の目立たないモデルから性格や行動を集成したのかもしれないという推測も成り立つ。あるいは歴史や文学作品に源泉をもつ人物とも考えられるが、現在のところその証拠は見えていない。つまり「カギ」や外側面からシャバンヌ分析に迫る手がかりはほとんど与えられていないわけであり、直接的な作品の内面分析だけが残された唯一の、そして最高の道ということになる。

IV 「シャバンヌ伯爵」のプラトン主義

王シャルル九世を中心とする旧教徒側と、コンデ公を旗がしらとする新教徒側との、サンロバールテルミイの大虐殺に至る内戦の過程が「歴史の枠組み」として、この作品にびったりはまっている状態は、歴史—宮廷記録から後半には心理のドラマが抜け出し、ひとり立ちするのが見られる『クレーヴの奥方』と比較して、歴史小説の手腕は『モンパンシエ公爵夫人』の方でより巧みに発揮されたと言えいふことができる。しかもやや単調でたゞたう小説の調子が、クライマックスに達する最後に近い密会の場面でみごとに高調し、輝きをすら発し、この場面のためにこの作品は書かれたのだという印象を打ち消すことができない。この効果は十九世紀小説美学の眼をもつてしても、『モンパンシエ公爵夫人』が短篇小説としてすぐれた芸術性をもっていることの証拠として認められよう。

形式的には本筋の物語り——すなわち歴史の枠組みによくはめこまれた愛人どうし、ギュイズとモンパンシエ夫人との物語りと、実質的に本筋の物語り——歴史の枠

組みに、より間接的に、より技巧的に支配されるシャバンヌとモンパンシエ夫人との物語りとをこの作品中で識別することができ、すでに述べているようにシャバンヌ造型の意味の重さのゆえに、前者の關係はかなり平凡なものであるのに反して、後者における關係は特異な意味と思想とをになうに至っている。

形式的な本筋の発端はブルボン家が、すでにギュイズ家と婚約が決まっていたメズィエール嬢をむりやり自分の家系のモンパンシエ公と結婚させてしまったことに始まる。夫は妻を同家の滞在地であるシャンピニに連れて行くが、内戦に出陣のため新婚期間はほんのわずかであった。実質的な本筋の始まりであるシャバンヌの登場もこの結婚と同時のころである。モンパンシエはシャバンヌ伯と友情を結び、後者はユグノオ側であるにもかかわらず親友のためにカトリック側につくことを宣言、周囲の疑惑の目から彼をかばうモンパンシエは妻といっしょにシャンピニに連れて行った。

モンパンシエは第二次内戦に出陣、不在は二年間にもおよんだが、そのあいだにシャバンヌとモンパンシエ夫人との悲劇的な關係はその準備段階をもったのである。

彼は彼女のまねな美しさと知性と徳をおどろきの眼をもつて眺め、ついには熱烈に愛するようになる。シャバンヌはこのとき丸一年も自分の気持ちをかしくしつづけ、その愛を告白したのちに夫人の態度のあまりにもの平靜さとひややかさに出会って、極度の恥辱と苦痛とを味わい相手の足下で死のうとさえ考えたが、これらをただ通常の恋愛心理とだけ考えていいものだろうか。恋愛感情はだれの心にも通常の動きをひきおこすものだと作者も書くが、はげしい恋情を行動にはなんら表わさずに一年間を送ることのなかには、十六世紀に流行した愛についてのプラトン主義の息づきが感じられる。

十六世紀において、愛についてのプラトン主義に言及した一つの中心——マルグリット・ドゥ・ナヴァールの『エプタメロン』第十九話は、現世において結ばれることに失敗したひと組の男女が信仰によって来世で結ばれる物語りに関して、「完全な愛」のありかたが討論される。「完全な愛するひと」とは、「恐れおののき、あえてその愛情を示せずに、遠くから女性を崇拜しているひと」でなければならなかった。プラトン主義はまた同時に、このようなありかたに対する男と女の見解の相違を

も浮き彫りにする。純粹でキリスト教的でもある愛のプラトン主義をほめたたえる女性側見解に対して、より現世的なものを求める男性側見解は、このような愛の形に必然的にまとりつく、憂愁と絶望の色合いから眼をそ向けるわけにはいかなかった。

だから恋愛が不幸を引きおこすことをじゅうぶん認識しつつも、あえて現世的に告白をおこなったシャバンヌが、相手に少しの怒りも、きびしい態度も生じないのを見たときの苦痛と絶望とは想像するにあまりある。彼はかえって相手からの罰を期待していたのである。それなのに崇拜する対象はふたりの関係を断ち切って彼をいしれぬ孤独の境地に落としこむのだろうか。

その後みな宮廷に集まる時期があり、ギユイズがモンパンシエ夫人への愛の証しとして王妹との結婚を放棄したことにより、夫人は決定的にギユイズを愛するようになる。モンパンシエはそれに感づき、ギユイズから離すべく、妻にシャンピニイに帰るよう厳命する。因惑したモンパンシエ夫人は、ギユイズとの連絡の手段にシャバンヌを利用しようと思いたち、バリで病気がちだった彼を呼びよせ、旅の途中で期待に胸をおどらせては参

じてきたシャバンヌと合流する。

——これにつづく最後の部分において、シャバンヌの心理分析は自己愛を中心とする人間的な次元と、完全な対象を崇拜的に愛そうとする一種神的な次元との相乗作用によってきわめて高調した段階を迎える。モンパンシエ夫人はギューイズへの愛のために自分を利用しているにすぎないと知ったときのシャバンヌのおどろきと苦悩ははかり知れなかったが——さらに手紙の運び役を頼まれたとき、それは彼にとって最後の打撃だったが、プラトン主義はその苦悩と打撃さえもかくす力を与えている。愛する対象への服従と献身と犠牲は、その対象が美において完全なものだと認識するたびごとに力を増し、現世的な報酬を次第に超越させて行く。

モンパンシエ夫人が自分のギューイズに対する気持ちを打ち明けるとき、自他の境界を取りはらった公平無私な、一種の絶対的立ち場に一瞬昇るシャバンヌは、彼女の感情のやさしさとこまやかさに感動し、そのような高い価値の心を所有したいという願いを抱かずにはいられない。けっきょくシャバンヌは手紙の運び役という絶望的な仕事を引き受けるよりほかの道はないのである。

もっとも、きわめて人間的な心が戻ってくるときには、せめてこんな役割りに対する彼女の反省と自分に対する感謝を望まないではなかった。そしてまた忍耐も限度に達してシャンピニの近くの友人の家にのがれ、手紙で愛するひとにさよならを告げたこともないではなかった。がそれも、彼女の完全な美しさに接すること、彼女の口から洩れる感謝のことばが、一瞬のうちにシャバンヌをプラトン主義の従順な信徒に返してしまふ。

さきほど述べたように、「完全な愛」にまわりつく絶望をシャバンヌは負わされているが、しかし依然としてその絶望は現世的なものであり、生命を死に至らせたり、愛の心を破壊するまでの力はない。シャバンヌはいく度も絶望に落ちいりながら、相手を崇拜的に眺めることによって新たな希望をとり戻す。つねにひとすじの光明に似たものが照らしているが、それは来世の、永遠の結びつきを目ざす盲目的な意志をばげましている。

さて、シャバンヌの内心での現世的なものや永遠のもののたたかいは、ギューイズとモンパンシエ夫人との深夜の密会がおこなわれる場面に接近していいよいよ激烈なものとなる。ユグノオの首領らと呼びよせて一挙に謀殺

しようとの計画のため、彼らを油断させようと一時王の側近からブールボン、ギユイズ両家のひとびとを遠ざけ、モンパンシエもシャンピニイに帰り、ギユイズも叔父の別荘に行った。ギユイズは旅といつわり、シャンピニイの近くまできて、シャバンヌに連絡してくる。そこでシャバンヌは出て行くのであるが、このときから人間的な嫉妬と、人間的なすべてを超越した完全な愛とのあいだの、アンビヴァレンツな心理分析は次第に白熱する。完全な愛は、愛する対象の喜びのためには嫉妬の全く存在しない境地に到達しなければならなかった。

シャバンヌにはギユイズの、夫人に会わせてほしいとの頼みを拒絶することも、またそれを夫人に報告しないでおくことも、さらに報告してしまつたあとでさえ、この密会の危険をこんこんとさとし、それを思いとどまらせることもできたはずである。実際彼にはそのような強い衝動がおこつたし、遠慮がちな表現法で相手にそれをわからせようとした。しかし愛する対象に従順さと忠実さを誓つたプラトン主義は、自分の心になんらの自己愛もないことを立証しなければならぬ。自己愛がないとは、現世的な報いを求めていないということであり、

「自分の利益のためにこんなこと（密会の危険のこと）をいうのではないのを知つてほしい」という気持ちから、愛する対象がなお不安とためらいにふるえているのを制するように、自分から積極的にギユイズを手引きする行動への第一歩を踏み出した。

モンパンシエ夫人は刻々進行する事態にあらがう力はない。シャバンヌにいわれた、はね橋をおろしておく件も、実行しなければいいのだと思ひながら結局は侍女に命じた。シャバンヌの方も彼女の理性の力を内心では期待していた。はね橋がおろしていないことを願つた。しかしそれはおりていたので、シャバンヌは最後の絶望に落ちいる。それでなくても喜びと期待に満ちたギユイズをここまで連れてくるあいだ、絶望と狂気のように荒れ狂う心にさいなまれつづけていたのである。いく度彼は剣を抜いてギユイズを刺し殺そうとしたか。

橋を渡り、ギユイズを夫人のへやに導くあいだも、物音を立ててモンパンシエに気づかせようという衝動におそわれた。狂気にまで高まるその衝動は、夫人への完全な愛ゆえに彼女の身の危険のことに気づくと、ただちにその熱気をさました。

モンパンシエ夫人は密会のあいだ、シャバンヌも、へやにはいつていてほしいと頼んだが、彼は決心がつかず、愛する者としてこの世で最大の悲しみを抱きながら、モンパンシエのへやに通ずる通路に退いた。

不幸にもそのあいだにモンパンシエは、橋を渡る足音に目ざめ、不審に思い、夫人のへやを見に行こうとした。夫人はギユイズといることの羞恥心からなおもシャバンヌに入室を頼んだ。シャバンヌは云い訳しつづけていたが、狂気と怒りにとらえられて思わず押し殺さない声を出したので、この通路に向おうとしていたモンパンシエにきこえてしまい、妻のへやにだれか男がいると思った彼はドアに身を打ちあてて破ろうとした。

V プラトン主義のマゾヒズムへの屈折

ドアを破ろうとしているモンパンシエの叫び声は、三人をふるえあがらせた。この瞬間のシャバンヌの心理を、作者はどのように分析しているか。

「シャバンヌ伯爵は、公爵の声をきき、妻のへやにだれもいないと公爵に思いこませるのは不可能だと見てとり、もし彼がギユイズ公爵を発見したなら、モンパンシ

エ夫人は眼のまえで愛する男が殺されるという痛苦を味わわねばならず、夫人の生命自体も安全ではあるまいと、その愛する情の高貴さゆえに悟ったので、前例のない寛大さから、自分に対しては不実な愛する女性と、彼女に愛されているライヴァルを救うために、自分の身を危険にさらそうと決心した⁽²⁰⁾」

自己愛はギユイズがモンパンシエに殺されることを願い、プラトン主義は愛するひとの苦しみを引きおこすそれを願わない。嫉妬はギユイズに向かい、純粋な愛はモンパンシエ夫人に向かう。シャバンヌの自己犠牲への決心はプラトン主義の一大勝利なのだろうか。それではなぜ、夫のモンパンシエに気づかれる可能性の非常に強いこのような夜に、シャバンヌはあえて密会をとり運んだのか。

この作品のこの個所が、書かれている以上のものを読者に読みとらせる力をもっているのを私は強調しなければならぬ。「愛する情の高貴さ」とか、「前例のない寛大さ」とか——シャバンヌの有徳な心情からくる、とっさの理解力と決断力がなおかつ表面心理にすぎず、もっと高く深い動機と動きとが存在する。そしてそれは読む

者にじゅうぶん伝わってくる。

シャバンヌは深夜愛するひとだけと室内にいる自分を
第三者——しかも彼女の夫に見せて、愛人どうしだと認められることをみずから望まなかったろうか。彼はどんなにしてもモンバンシエ夫人を所有することはできなかった。しかしこの限界的な状況が彼女の所有をある意味で達成させてくれたのではないか。もちろんこれは完全に現世的な所有ではない。しかし憂愁と絶望にひたされながら永遠は待つ来世における所有ではなく、ぎりぎりのところで現世的に実現した所有なのである。

モンバンシエにとっては、妻と密通したのがギユイズであろうとシャバンヌであろうと、妻の罪に変わりはなかったであろう。発見した現場にただよう一種不可解な空気におされたモンバンシエがしきりと説明を要求するのに対して、シャバンヌが間一髪のところでのがしてやったギユイズの名を決して口に出さなかったとしても、それはなんらモンバンシエ夫人を救う力とはならなかった。もしモンバンシエが剣をもっていたならば、一瞬のあいだは深く信じていた友をここに見たおどろきに四肢が麻痺していたとしても、つぎの瞬間にはそれを抜いて

シャバンヌを刺し殺し、ひょっとしたら妻のからだをも刺しつらぬいていたであろう。

プラトン主義は勝利したのか。愛する対象の幸福がつねに念じられているように見えながら、その実は相手が危険な状況にはいるのをみずから推進し、相手との関係が断ちきられて孤独になるのを恐れるあまり、異様な形において愛する対象と結ばれる——いや、愛する対象によりかかる。シャバンヌがいく度か落ちいった絶望において死ななかったのは、来世における希望——すなわち「完全な愛」からさしこんでくる光明のゆえだというよりは、実は絶望や苦悩の与える快樂——正常な人間が避けるはずの堪えがたい苦悩や苦痛のなかにひそむ歡喜がその原因となっていたからだといまや了解される。ここにおいてプラトン主義は一種の精神的マゾヒズムに屈折する。それは相手の幸福よりはみずからの快樂を追うが、このような場合は、一見すればプラトン主義の敵であるかに見える自己愛の方が、よりよくその防壁となるであろう。すなわち自己愛は異常な愛の形への深入りを避けることによって、自己の破滅を救うと同時に、愛する対象の破滅をも救うからである。

プラトン主義を相互的な関係においてではなく、三角関係において悲劇的に探究するという成果をラ・ファイエット夫人はこの作品において結果的に達成したことになるのであり、したがって『モンパンシエ公爵夫人』は『クレヴの奥方』とは異質な、極限的な意味をになう、きわめて独創的な作品だという結論をくだしても誤りではない。

(1) 同じ *Princesse* を「奥方」と訳したり「公爵夫人」と訳したりするのは全く慣用による。前者はうちおう名作としてその翻訳が流布され、『クレヴの奥方』という題名で一般になじまれているのに反し、後者は翻訳め少なくなじみがうすい。

- (2) Henri Coulet: *Le Roman jusqu'à la Révolution*, Armand Colin, 1967; Tome 1, p 215
- (3) Harry Ashton: *Madame de La Fayette, Sa vie et ses œuvres*, Cambridge University Press, 1922; p 80
- (4) Le Comte d'Haussonville: *M^{me} de La Fayette*, 4^e édition, Hachette, 1919, pp 165—172
- (5)(6) Ashton: op. cit., p 80
- (7) d'Haussonville: op. cit., p 168
- (8) 一橋論叢 昭和四十四年七月号 『クレヴの奥方』

における「告白」の構造とその意味」

- (6) Madame de La Fayette: *Romans et Nouvelles*, Garnier Frères, 1961; p 33
- (9) Ashton: op. cit., p 66 同く André Beaunier: *Correspondance de Madame de La Fayette*, Gallimard, 1942; pp 37—39
- (11) Émile Magne: *Le Cœur et l'Esprit de Madame de La Fayette*, Émile-Paul Frères, 1927; pp 19—20
- (21)(22) Ibid.
- (41) Magne: *Madame de La Fayette: Romans et Nouvelles*, Garnier; p 415, Notes
- (51) Magne: op. cit., p 21
- (91) Antoine Adam: *Histoire de la Littérature française au XVII^e siècle*, Tome IV, del Duca, 1958; p 178, Note (1)
- (71) Histoire d'Henriette d'Angleterre; *Mémoires de M^{me} de La Fayette*, Les meilleurs auteurs classiques, Flammarion, Paris; p 233
- (81) Ibid., Préface de l'Auteur
- (91) *Romans et Nouvelles*, p 26
- (92) Ibid., p 29

(一橋大学講師)